

診療局：内科《内分泌代謝内科》

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
診療局参与 兼内分泌代謝内科部長	大野 昭
医 長	倉敷 有紀子
医 員	清水 勇雄

—概要—

常勤医は、清水医師、倉敷医師、大野医師の3名。外来は森下医師 矢頃医師 梶本医師 大阪大学総合地域医療講座 福井助教を加えて担当した。

入院診療の主体は糖尿病教育入院であり、専門治療のみならず事務職を含む多職種協働によって患者自己管理の育成を目指した。運動療法は原則全例で作業療法士が個別指導し、共通内容は教程化した。高齢者では認知機能評価を行い退院後療養資源の調整に利用した。糖尿病妊娠は当院の経験ある分野で、産科との信頼関係のもと積極的に診療した。周術期血糖管理は手術部諸診療科の協力の下に早期管理開始をすすめた。複数疾患を有する糖尿病患者の治療最適化は課題である。急性代謝障害には救急診療科や総合内科、腎不全進行には腎臓内科の協力によって糖尿病診療が成立していくことに留意して今後の貢献を図りたい。

外来診療は糖尿病・内分泌疾患が主体である。少数例の専門診療（バセドウ病アイントープ治療 異所性ACTH産生症候群局在診断 神経内分泌腫瘍診断 視床下部下垂体疾患の継続管理）も実施した。

糖尿病透析予防外来は腎症2期以降の患者さんに対して食事や生活習慣の改善を通して腎機能悪化を阻止することを目指している。実績24人であるが今後担当体制を強化し「腑に落ちる自己管理」の体得、転帰改善、症例数を増加、運動療法面の工夫を取り入れたい。

フットケア外来は経験ある糖尿病専門看護師を軸に専門靴装具作成者も配して、足病変の阻止、療養行動の支援、形成外科・循環器内科・大学の専門診療科との調整を行った。糖尿病外来通院者での心血管事故による突然死が、覚知できた範囲であるが、みられなかったことは今年度の特筆点であると考えます。

臨床検査としてはインスリン・Cペプチドの院内測定による迅速化がある。

人材育成としては、日本糖尿病療養指導士認定がふえて薬剤師 作業療法士 管理栄養士にひろがった。外来看

護部でも大阪糖尿病療養指導士認定者による患者対応が可能となった。

地域医療での糖尿病療養指導研鑽として多職種対象の研修会を実施、2次医療圏域糖尿病診療推進部会の主宰をした。

患者対象には糖尿病教室 原則月10コマでほぼ月2クールを実施している。

市民対象には生活習慣病予防教室 ほぼ月1回実施、また放送大学面接授業「糖尿病」を担当した。

—実績—

2015年度の新入院患者の疾患構成

糖尿病123 1型糖尿病14(劇症1) 緩徐進行1型糖尿病7 2型糖尿病101 その他の糖尿病1
甲状腺中毒1
副腎疾患11 アルドステロン症4
視床下部下垂体疾患2
低血糖症2
ショック1